

(別紙様式3)

県立高等学校教育課題研究指定校事業最終報告書

学校番号	46
学校名	愛知県立 小牧南 高等学校
校長氏名	小塩 卓哉

1 はじめに

平成25年から総合教育センターと研究校（日進西高等学校）との共同研究として「高等学校における多様な学習成果の評価方法に関する調査研究」が、平成27年から国の研究指定（岡崎西高等学校）「論理的思考力と表現力の育成を目指した各教科における指導と評価の工夫改善」が推進され、愛知県の国語科におけるアクティブ・ラーニング研究はかなり進捗している。本校では、先進校に学びつつ、下記のテーマで研究を進め、生徒の主体的・協働的な活動による深い学びを生み出す授業改善に取り組むことにした。地域の進学校として一定の評価を受け、生徒の気質も真面目で、落ち着いた環境で授業が行われているが、本校にふさわしいアクティブ・ラーニング研究の推進が、一層の活力に満ちた教育活動の展開に貢献するものと考えている。

2 研究テーマ

思考力・判断力・表現力を育成するための取組
国語科におけるアクティブ・ラーニングの視点による授業改善

3 研究目標

- (1) 国語科において、アクティブ・ラーニングを導入するに当たり、各評価の観点に対応したパフォーマンス課題及びループリックを開発し、パフォーマンス評価を各教材の一連の指導の中で、有効に行う方策を研究する。
- (2) 「思考力・判断力・表現力」を磨くことを目標とし、言語活動を充実させるために、メディアリテラシーを養うための授業方法を確立する。
- (3) グループ単位の活動を通して、対話的、主体的な学びの機会を創出し、自己評価や、相互評価をより確かに見えるようにする。
- (4) 地歴公民科、数学科、理科においても実践を行い、全校的な取組の中で国語科の学びの汎用性を高める研究とする。

4 目標の達成に向けた取組の概要

- (1) 県内・県外のアクティブ・ラーニング先進校を視察し、優れた実践成果を授業者から直接学び、本校の授業改善に積極的に取り入れた。また総合教育センターの設置するサポートデスクも活用し、本校の授業案へのご指導を受けた。
- (2) 国語科教育・授業研究の専門家として、中京大学酒井敏教授、名古屋大学柴田好章教授を招き、研究検討会議・公開授業・研究協議会等において指導・助言を受け、授業実践への評価を行った。
- (3) 5回わたって公開授業を行い、のべ200人以上の来校者を集めて、アクティブ・ラーニングの実践事例について情報交換を行い、研究の普及と深化に努めた。

5 研究の実際（平成 28 年度から平成 30 年度まで）

実施年月日	内 容	備 考 (対象生徒等)
1 年 目	<p>7月 7日 第1回校内研究委員会</p> <p>7月 14日 第1回研究先進校視察（岡崎西高校）</p> <p>7月 19日 第2回校内研究委員会（名古屋大学柴田好章教授出席）</p> <p>7月 29日 中京大学酒井敏教授からの授業案に関する第1回指導（中京大学）</p> <p>8月 3日 京都大学松下佳代教授による講演「ディープ・アクティブラーニングとその評価」等受講（教育改革先取り対応セミナー）</p> <p>8月 22日 第3回校内研究委員会</p> <p>9月 20日 热田高校におけるアクティブ・ラーニング講義</p> <p>10月 11日 日進西高校からの指導、総合教育センターからの指導</p> <p>10月 21日 第4回校内研究委員会</p> <p>10月 28日 名古屋大学柴田教授によるアクティブ・ラーニングに関わる校内研修会、公開研究授業（青ちづる教諭）、第1回研究検討会議 47名来校</p> <p>11月 14日 小牧市立北里中学校の公開授業研究会への参加</p> <p>11月 30日 愛知県国語教育研究会高等学校部会への参加</p> <p>12月 1日 第5回校内研究委員会</p> <p>12月 11日 中京大学酒井教授からの授業案に関する第2回指導</p> <p>1月 21日 早稲田大学町田守弘教授からの指導</p> <p>1月 27日 第6回校内研究委員会</p> <p>1月 31日 公開研究授業（池山朋花教諭）、第2回研究検討会議 2名来校</p> <p>2月 14日 広島県立大門高校からアクティブ・ラーニングに関わる視察</p> <p>2月 28日 中京大学酒井教授からの授業案に関する第3回指導</p>	サポートデスク 9名参加 早大町田教授からの指導
2 年 目	<p>5月 15日 第1回校内研究委員会</p> <p>6月 5日 碧南高校視察・協議（碧南高校教室・会議室）</p> <p>6月 28日 授業力向上を目指した AL の実践に関する研究（総合教育センター）</p> <p>7月 7日 第1回研究検討会議</p> <p>7月 27日 第2回研究検討会議</p> <p>8月 4日 NIE 全国大会（名古屋国際会議場）</p> <p>8月 10日 教育改革先取りセミナー（名古屋観光ホテル）</p> <p>8月 29日 総合教育センターサポートデスク相談（総合教育センター）</p> <p>9月 27日 総合教育センターサポートデスク相談（総合教育センター）</p> <p>10月 12日 岐阜県立多治見高校視察・協議（多治見高校・会議室）</p> <p>10月 17日 中京大学酒井研究室訪問（中京大学）</p> <p>11月 7日 東海南高校視察・協議（東海南高校教室・会議室）</p> <p>11月 9日 第2回校内研究委員会</p> <p>11月 10日 研究授業（池山朋花教諭）研究授業（国語 青ちづる教諭、地歴 石川直大教諭）・研究協議・パネルディスカッション 83名来校</p> <p>11月 15日 幸田高校視察・協議（幸田高校教室・会議室）</p> <p>11月 17日 全国連兵庫大会（兵庫県立神戸高校）</p> <p>11月 22日 研究授業（福田亜里沙教諭）</p> <p>12月 23日 県大講座「あゆち」（愛知県立大学）</p> <p>1月 11日 第3回校内研究委員会</p> <p>1月 24日 碧南高校視察・協議（碧南高校教室・会議室）</p> <p>1月 30日 総合教育センターサポートデスク相談（総合教育センター）</p> <p>2月 8日 第3回研究検討会議</p>	地歴公民科 4名参加 3名参加 4名参加 地歴公民科 国語科 7名参加 国語科 理科 3年4組現代文 3年2組古典 2年1組日本史 数学科 2名参加 2年3組古典 2名参加 数学科 国語科

年 目	6月7日	第1回校内研究委員会	地歴公民科 1年6組国語総合 国語科 国語科 3年4組現代文
	6月19日	碧南高校視察・協議（碧南高校教室・会議室）	
	7月9日	研究授業（田中琢斗教諭）・研究協議 12名来校	
	7月24日	第1回研究検討会議（名古屋大学柴田教授出席）	
	8月17日	奈良県立高田高校からアクティブ・ラーニングに関わる視察	
	8月31日	第2回校内研究委員会	
	9月12日	総合教育センターサポートデスク相談（総合教育センター）	
	10月11日	中京大学酒井研究室訪問（中京大学）授業案についての指導	
	10月24日	第3回校内研究委員会	
	10月30日	研究授業（福田亜里沙教諭）・研究協議・パネルディスカッション併せて国語・地歴・公民・数学・理科で公開授業 69名来校	
	11月14日	総合教育センターでの課題研究7校の合同研究発表会	

6 研究のまとめと考察

3年間の実践・研究の中から、研究主務者の青ちづる教諭の実践例を3つ挙げ、考察する。

（1）第2学年古典B「作品を脚本化し、演じる」

それまでの授業では、口語訳をしてくることを予習として課し、授業内で口語訳・文法事項・登場人物の心情などの確認を行っていた。生徒ははじめて知的好奇心ももっているが、予習として課されたこと以外を調べてきたり、自分の力で人物像を深く捉えようとしたりすることまではできていなかった。そこで、脚本化し、演じるという活動によって、作品を深く学び、理解しようとする態度を養うこととした。

『大鏡』「南院の競射」の場面を脚本化して演じることにより、登場人物の人物像に迫るという試みである。先に一斉授業で口語訳を確認してから脚本化する方がスムーズにいくとは思うが、今回は実験的な試みとして、教師は、口語訳や説明は一切せず、脚本化するためのワークシートとわずかな道具を用意するだけで、まずは、すべて生徒に自由にやらせてみた。インターネットで口語訳を調べることは禁止とし、間違ってもいいから自分たちの力で訳すよう指導した。

準備のための3時間は、どのグループも活発に意見交換し、演じる生徒、小道具を作る生徒、演出をする生徒等に分かれて楽しそうに準備をしていた。何とか自分たちの力で進めようとしており、教師の力を借りに来る場面は全くなかった。本番の劇では、全然違う話になっていたり、人物関係が正しく把握できていなかったりというグループもあったが、

主題となる道長の剛胆さについては正しくとらえられているグループが多かった。

最も評価の高い脚本を演じたグループは、演技をする生徒の後に心情をつぶやく生徒がついて進行していた。また、脚本化のまとめとして、他のグループの演技を見ながら自分の脚本に違いや疑問点を書き込ませ、それをパフォーマンス課題として提出させた。次の時間に、教師から内容や時代背景について説明し、自分たちの脚本を振り返らせた。

後日、この試みについてアンケート調査を実施した。「この授業は楽しかったか」という質問に対しても、「とても楽しい」「まあまあ楽しい」と回答した生徒が98%であり、「この授業を通して本文の内容はよく理解できたか」という質問に対



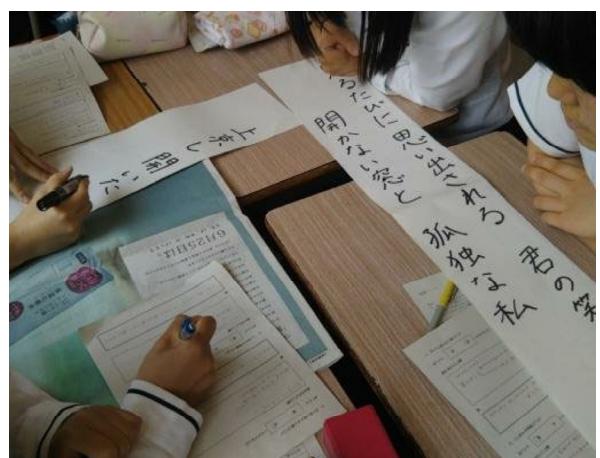
【写真1 実演する生徒たち】

しては、「とてもよくわかった」「まあまあわかった」と回答した生徒が96%であった。このように、生徒たちは主体的・協働的に取り組む事ができたと言える。しかし、深い学びについては、まだまだ課題が残る。背景や人物関係について深く調べる生徒がいなかつたため、道長と伊周の対立を演じきれていないグループがほとんどであった。補助資料を用意するなどの工夫が必要であると実感した。

(2) 第3学年古典B「和歌の贈答に挑戦しよう」

『蜻蛉日記』の学習のまとめとして和歌の贈答に挑戦させた。前年度には短歌道場の形式で自分の和歌の創作と発表を行っているが、今回は贈られた和歌を踏まえて返歌を作るという、より高度な創作に挑戦させることにした。作歌の条件としては、男女間の贈答とし、表現する心情は教師が用意したくじによって決めることとした。生徒は、まず、5名程度の班を作り、くじによって決まった心情にふさわしい場面を話し合って決める。その心情は、贈答のどちらかに当てはまればよいこととした。作歌の際には、「和歌の贈答が成り立っているか」「和歌の修辞法などを用いて贈答のおもしろさが表現できているか」「心情が伝わる和歌を創作できているか」の三点に気をつけるよう指導した。その後、班ごとに発表させ、聞く生徒はループリックにより評価した。

生徒たちは、場面を考える話し合いは活発に行っていたが、和歌の創作には時間がかかっている様子であった。今回は二首に共通の語を入れたり、掛詞を入れたりすることも目標にしているため、作歌に苦労する姿が見られた。発表の際は大きな盛り上がりを見せ、特に、修辞法を用いた班は高く評価されていた。ただ、技巧に走りすぎ、心情を伝えるという重要な点がおろそかになってしまう班もあった。今回のループリックの場合、修辞法の有無で評価に差が出る（生徒が差をつけやすい）という結果になっていたため、心情を伝えるという点をより重視していくループリックに改善することが必要であると感じた。



【写真2 グループで和歌を創作する】

(3) 第3学年古典B「心情をそのまま表現することなく、想像させて伝えることのできる短歌を作ろう」

『無名抄』「俊成自讃歌のこと」のまとめとして、本文中にある「心情をそのまま表現するのではなく、聞き手に想像させて伝える短歌」を実際に創作させ、俊恵の主張を実感させる取り組みを行った。なお、この授業のうち発表の時間については、本研究の中間発表会の際に公開授業として実施した。

生徒は6人班を作り、「心情語を用いずに、心情を想像させる短歌」を創作する。どのような心情を表現するかは、自分たちで決めることとした。ただし、本文にあるように、「身にしみる」場面を歌にすることという条件にした。生徒たちは、班ごとに場面を考え、伝えたい心情を考え、短歌を創作した。それを班ごとに発表し、聞いている生徒たちはループリックに従って評価した。その際、司会・進行も生徒が行い、教師はループリックの確認と、全体の進行の補助を行った。

ふだんから、アクティブ・ラーニング形式の授業に慣れている生徒たちであるため、多数の参観者の前でも気後れすることなく伸び伸びと発表を行った。他の班の発表も、しっかり聞き、感想を述べたり質問をしたり、主体的に参加する姿が見られた。司会・進行の生徒たちの活躍も素晴らしい、個性を認め合うクラスの雰囲気が出たように思う。「心情語を使わずに、心情を想像させることのおもしろさを味わうことができた

か」という質問に対しては、「よくできた」「まあまあできた」と回答した生徒が96%、「班の一員として主体的・協力的に活動できたか」という質問に対しては、「よくできた」「まあまあできた」と回答した生徒が95%であった。

教師の反省としては、まず、ループリックがうまく機能しなかった点があげられる。短歌は、ただわかりやすければいいというものではなく、だからといって、難解であればいいというものでもない。心情語を使わずに表現しつつも、聞き手に心情を想像させて味わわせるという点を、簡潔なループリックで評価させるというのは予想以上に難しく、今後も引き続き研究課題としていく必要があると感じた。また、発表の次時に、創作した短歌の振り返りと本文のまとめを行ったが、内容をあまり深めることができなかつたので、今後改善が必要である。

7 成果と課題

(1) 成果

アクティブ・ラーニングの授業を継続することで、生徒の学習への興味・関心が確実に高まった。生徒は自ら課題を見つけて学習に取り組み、仲間とともに学習を深めて行けるようになった。アクティブ・ラーニングとともに学習集団としてクラスが成長したことを指導者も実感した。パフォーマンス課題や協働学習についても一定の知見が得られ、年を追って改善することができた。また、国語科を軸として、他教科、総合的な学習や生徒会活動など全校的にアクティブ・ラーニングを広げたことにより、積極的に発信できる生徒へ、生徒の変化が見られるようになった。気軽に授業を見せ合ったり、ワークシートを共有したりするなど、教師間の学び合いも活性化し、若手教員の授業力が着実に向上している。

なお、本校の研究の成果は、年次ごとに「中間まとめ」として、冊子にまとめてある。その際、先進校視察記録、指導教授からの助言内容、研究会への参加記録等は逐次掲載してあるので、アクティブ・ラーニングに関心のある学校に有用であろう。また、具体的な学習指導案、ワークシートなども収めてあるので、利用が可能である。

(2) 課題

どのような力を付けるために、所与の学習活動をしているのかを生徒に意識させることについては、かなり達成できたが、その活動を評価するためのループリックの作成は難しく、今後も研究を継続する必要がある。



【写真3 ループリックを用いて評価する】

8 Web ページアドレス

7 の(1)で触れた三年間の研究内容を、平成 31 年度に、本校創立 40 周年記念サイト (<http://komaki-minami.jp/>) の中で広く公開する予定である。

9 おわりに

アクティブ・ラーニングは継続しないと生徒が育たない、というのが実感である。特別な機会によそ行きの授業を構えるのではなく、日頃の取組を今後も継続して行きたい。うまく行かない時もあるが、目の前の生徒を見て、日々改善していくことである。3年間の指定を受け研究を継続していく中で、国語科の授業を核に、学習集団として成長した生徒が、クラス活動や学校内外の行事でも、他と関わり積極的に発信する姿を見せてくれている。また、生徒だけでなく、指導する教師自身も協働的に実践を行う、アクティブラーナーとなってきた。その意味でも、学校は確実に変わってきたと言える。

この指定校事業では、「思考力・判断力・表現力を育成するための取組」の研究を行う 4 校が、国語・地理歴史・数学・理科とそれぞれ教科を指定され、研究を進めてきた。本校は国語の指定を受けたが、学校全体で組織的・主体的に取り組むために、他の 3 教科でもアクティブ・ラーニングを実施してきた。国語科ほどには 3 教科では行き届かなかつた部分もあったが、校内研究委員会を中心として気運を盛り上げ、公開授業の場に 4 教科が揃って立てたことは大きな成果であったと考えている。また、本校ではアクティブ・ラーニングの学びを、「総合的な学習の時間」にも導入することで、来年度から先行実施される「総合的な探求の時間」で要求されるような、実生活・実社会と自己との関わりの中で、自ら課題を見出すような学習プログラムをいくつも開発することができた。小牧市と連携した生徒会活動も含めた教科外の学習活動で、主体的な学びが定着し始めたことも、今回の研究指定による収穫である。

本校の研究を進めるに当たり、先進校を何度も訪問させていただき、授業を参観し、具体的なご教示をいただいた。また、中京大学文学部教授、酒井敏先生、名古屋大学大学院教授、柴田好章先生には、さまざまな機会にご指導を受け、研究を方向付けていただいた。改めて感謝申し上げます。

参考文献等

- 松下佳代『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する』(日本標準ブックレット)
- 高木展郎・大滝一登『アクティブ・ラーニングを取り入れた授業づくり』(明治書院)
- 小林昭文『アクティブ・ラーニング入門 (アクティブ・ラーニングが授業と生徒を変える)』(産業能率大学出版部)
- 田中博之『アクティブ・ラーニング実践の手引き—各教科で取り組む「主体的協働的な学び」』(教育開発研究所)
- 「読み」の授業研究会『国語科の「言語活動」を徹底追究する学び合い、学習集団、アクティブ・ラーニングとしての言語活動』(学文社)